

# 社会の円滑

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

旧ソ連に5回視察に行ってみて、社会のバランスが、いろんな形で構成され、維持されて、保たれていることがわかった。しかしこうした中で、きわだって目立つのは、男女の比率が自然の調節に反して、男が激減し男子不足が極端になっていることであった。その原因は、3千万人に上る戦争の犠牲者である。旧ソ連は、そのことを記念碑を作って、国民に知らせているが、それは戦争だから仕方がないが、然し“仕方がない”と打ち捨て置いていいではない。

その結果、妙なところに珍現象が出ている。幼稚園の園児一人に3人位の保育がつきそって散歩している姿に、何回かお目に掛った。国民は誰もが職業につかなければならないのだろうが、考えさせられることである。逆の現象は、男手が不足しているので、車輛2車連結のバスや電車が、女性の手で運転されなければ、間に合わなくなっているのである。建築の人手については直接情報を入れることは出来なかったが、結論は同じことであると思った。

英国、独逸、ソ連、世界の中の優秀な民族なのに拘わらず戦争を避けることが出来ないということは、そのこと自体、悲劇でもあるが、その結果、家庭は破壊され、国の復興の障害は除去されることなく、引続きアンバランスが混乱を招いているのである。今後の結婚、就学、職業、社会の総ての配合に多くの

障害をもたらし、その結果は遺産相続にまで、大きなアンバランスとしてつながっているのである。

日・独・伊三国同盟のとき、平沼内閣は、何が何だか、さっぱり分らぬと、内閣を投げだしたが、その方がどれだけ正直だったか分らない。分ったようで、何も分らなかったのが、近衛内閣であった。そんなことを参考に今後の対外政策を検討すべきではないか。とても、一筋縄では解決するシロモノではなかった筈である。かと云って、外交政策というものは一年も三年も経って、ゆっくり考えて行って良いものではない。外相にしっかり頑張って貰いたい所以である。

戦時中の内閣のように、あまり大物ばかりでも困ったものであるが、昨今の内閣のように、小物ばかりで、責任感のない者と、責任のがれの集団にも困ったものである。昨今の汚職、贈収賄の特色はこんなところにある。

そこに、中間ボスの買収工作が活躍するのである。小物は、いちど総理になれば、もうそれで、思わぬ見付けものをしたことと一緒にくたになる。一国の政治をそのように取扱って良いだろうか。

満足な政治を実行するには、金も、人も足らぬということか。その意味では、50歩、100歩の人物が多すぎる。政治家が政治家の去就に迷っていると思う。自ら政治家を名のる者は、去就を明らかにすべきであろう。